

鹿児島県の昆虫52

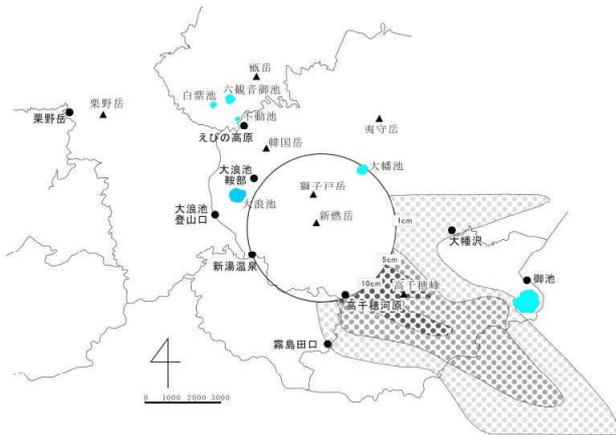
新燃岳の噴火が昆虫に与えた影響

昆虫担当 金井 賢一

鹿児島県立博物館では、2013年から環境省の許可を受け、霧島山系の国立公園特別保護地区での昆虫調査を継続してきました。企画展「霧島 火山の噴火と生きものたち」では、その成果を紹介いたします。

○降灰の有無が蛾類に与えた影響

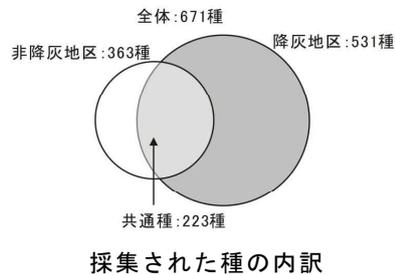
新燃岳は2011年1月に噴火して、南東方向に大量の火山礫・火山灰を降らせました。この影響を探るために、風上方向：非降灰地域（栗野岳、えびの高原、大浪池登山口）と風下方向：降灰地域（新湯温泉、高千穂河原、御池）とに注目して、灯火採集により蛾類を調査しました。なお、この調査は館外協力員でもある、鹿児島県昆虫同好会の福田輝彦氏が主に行ったものです。



新燃岳を中心にした調査地位置と降灰状況

2013年から2015年までの3年間に、非降灰地域で24回、降灰地域で37回の調査を行い、28科671種の蛾類が報告されました。

このうち、非降灰地域でしか確認出来なかった蛾類は140種いました。ただし、このうちほとんどの種は過去にも非降灰地域にしか見られなかったものです。



採集された種の内訳

新燃岳噴火前には降灰地域での確認記録があったにもかかわらず、噴火後に見られなくなったのはオオバトガリバ、ナカオビカバナミシヤク、コガタツバメエダシヤク、ノヒラトビモンシヤチホコ、アカエグリバの5

種でした。この5種が降灰によって地域から消えたのか、もっと丹念に探せば見つかるものであるのか詳しいことは不明ですが、蛾類は降灰後も多くの種が生き残り、あるいは周辺部から再び侵入してきたと思われます。



オオバトガリバ コガタツバメエダシヤク アカエグリバ

○降灰の下で越冬していた昆虫

ニワハンミョウは幼虫あるいは成虫で、土中にて越冬している昆虫です。高千穂河原では約10cmもの火山礫・火山灰が積もったので、かなり影響があったのではないかと心配していました。しかし、噴火2年後の2013年4月に確認したところ、多くの個体が火山礫の上を飛び回っていました。



ニワハンミョウ

ハルゼミやヒグラシは幼虫の状態にて越冬します。厚く積もった火山礫から這い出して羽化出来るのか、気になりました。噴火直後は立ち入り禁止地域でしたので確認出来ませんでした。2012年7月には新燃林道でヒグラシが、2013年4月には高千穂河原でハルゼミが大合唱していました。



新燃林道のヒグラシ



中岳探勝路のハルゼミ

2011年に新燃岳が噴火した直後、県立博物館には「この噴火で生きものはどのような影響を受けるのでしょうか？」という質問が相次ぎました。しかし、噴火前の状況を文献からしか知ることができず、また噴火後も現地調査をしていなかったため答えられませんでした。今後少しずつデータを集めて実態を把握しようと考えています。ご期待ください。